

♪ 2020年度 *poco a poco* ♪

Nr. 16 2021年1月13日(水)

文責:プファイル・辰巳

## よい1年になりますように・・・

2021年が幕を開けました。みなさんはどこでこの新年を迎えられたのでしょうか。新型コロナウイルス感染防止のため、様々な制約を強いられた冬休みでした。お出かけや友人知人との交流もままならず、大人も子どももストレスを感じている人は多いと思います。ドイツではロックダウンが1月末まで延長されました。なかなか減らない感染者数に思わずため息が出てしまいます。一方で予防接種が始まり、希望の灯がともりました。長い長いトンネルはまだまだ続きそうですが、はるか彼方に光が見えてきた感じです。残念ながら子どもたちは1月末まで登校できませんが、健康に留意しながら忍耐と希望を持って進んでいきましょう！今年もどうぞよろしくお願いたします。



### オンライン授業でお会いしましょう！

中学部はクラスルーム、小学部はズームによるオンライン授業が始まりました。音楽科の授業も各学年週1回程度進める予定です。音楽室ではみんなで歌ったり、リコーダーを吹いたりすることはできませんでしたが、オンラインなら大丈夫。久しぶりにPCの前で大きな声で歌ってみましょう！教科書、ファイル、リコーダーまたは鍵盤ハーモニカを用意して待っていてください。

## 音楽こぼれ話 <語源を探ろう④>

### ピアノをPF と省略するのは何故？ >

日本は世界中で第1位といわれるほど家庭にピアノが普及しているそうです。都道

府県によって差はありますが、全国平均で20%を超えており、4~5軒に1台はピアノが普及している計算になります。

それほど日本で愛されているピアノという楽器。弦楽器や木管楽器に比べると、そう長い歴史を持っているわけではありません。「弦をハンマーでたたく」というピアノの基本機構が発明されたのは18世紀の始め。それまでは弦を爪のようなもので弾いて音を出すチェンバロやクラヴィコードと呼ばれる鍵盤楽器が普及していました。

J.S.バッハの時代はこの時期に当たり、モーツァルトの時代は初期ピアノからモダンピアノへの過渡期になります。ドイツ・オーストリア・イタリア・イギリスなど各国で技術改革が進められました。

シュタインウェイやベツヒシュタイン、ベーゼンドルファーなど世界に名だたるピアノ制作会社ができたのは、19世紀の前半から半ばにかけて。ちょうどベートーヴェンやシューベルトの古典派時代から、「ピアノの詩人」と呼ばれたショパン他、シューマン、メンデルスゾーン、リストなどロマン派の作曲家が登場し、続々とピアノの名曲が生まれた時代でした。

「ピアノ」という名称は、その過程で「piano(弱い音)も forte(強い音)も出せるチェンバロ」と呼ばれていたイタリア語から生まれました。チェンバロでは演奏に強弱をつけることがほとんどできなかったからです。こうして歴史的には「ピアノフォルテ」または「フォルテピアノ」と呼ばれていたことから、現在でも略称として「PF」という表記がCDカバーやコンサートプログラムに用いられています。

日本でピアノの生産が始まったのは1900年からです。それまで木目のピアノが主流だったのを、漆黒一色に塗装することで木目を合わせる必要をなくし、最良の木材を継ぎ合わせ、大量生産を可能にしたと言われています。黒色ピアノはこうして日本からドイツへ、そして世界へと広がったそうです。日本の住宅事情に合ったアップライトピアノや音量を低下させるペダルなどの開発に、日本のピアノ会社が貢献したことは容易に想像できることと思います。

そして現代はデジタルの時代です。20世紀後半からピアノも「電子ピアノ」の時代に入りました。鍵盤のタッチもピアノと比べてほとんど遜色ない電子ピアノを、ヘッドホンを着けて真夜中に練習できる時代になりました。音楽の世界でもどんどん技術改革が進んでいます。ドイツではその歴史的な変遷を作曲家所縁の博物館やコンサート会場などで目の当たりにし、また実演を聴く機会もあります。コロナ制限が終わったら、ピアノのご先祖さま、チェンバロや有名なピアニストの演奏会などに、是非足をお運びください。